

『#夜警』（米澤穂信著）を読んでみた。著者は、『氷菓』で角川学園小説大賞奨励賞受賞。『折れた竜骨』で日本推理作家協会賞受賞。『黒牢城』で直木賞受賞。

本作は、『満願』に収められた短編の一つである。2014年のミステリー部門の評価においてに国内部門1位となり、史上初のミステリーランキング3冠に輝いた。「夜警」、「万灯」、「満願」の3編がNHK総合でミステリースペシャルとして2018年8月にテレビドラマ化された。「夜警」の安田顕演じるYの静かな演技が原作の緊張感を見事に再現し、高い評価を得た。映像化によって、Kの「演出」の不気味さがより際立ち、原作のテーマがさらに深く伝わったという。

K巡査の葬儀が終わった後、Y巡査部長は振り返る。あいつは警官に向かない男だったと。Kはすぐに拳銃を抜こうとする癖があった。また、失敗を小細工でごまかそうとする男だった。そのKが殉職したというところから話が始まる。それは、夫が刃物を振り回しているとの女性からの通報を受けて出動した事件であった。短刀を向けて突っ込んでくる男にKは何発も発砲した。しかし、男は止まらずKは首を切られた。血を吹き出しながらもしばらくは生きていたKは、最後に「こんなはずじゃなかった。うまくいったのに。」とつぶやいて死んだ。Kの兄は、あの日弟から「とんでもないことになった」とメールがあり、そういうときはろくでもないときだと言い、「あいつが勇敢に死んでいったなんて思わない。あいつは駄目な男だった。」と言い切る。そして事件の真実の姿が浮かび上がる。

前段で、交番近くの工事現場で、作業員の一人のヘルメットに石が当たったという報告がある。Yはダメな新人を厳しく指導して、失職に追いやり、その新人は自殺をしてしまったという過去を持つ。もう一つ、夫に浮気を疑われて、暴力を受けており殺されかねないという訴えがあった。

最後に、Y巡査部長はK殉職の真相を推測するのである。Kは「正義感が強い警官」として殉職したように見えるが、Yは彼の性格や行動に疑問を抱く。物語が進むにつれ、Kの「小細工」や「演出」が明らかになり、正義の名の下に隠された自己顕示欲や不安が浮き彫りになる。表面的には「正当な職務遂行」に見える事件が、Yの視点から再検証されることで、読者は次第に「正義とは何か」、「職務とは何か」という問いに引き込まれる。

読み終わって、私は唸るしかなかった。傑作である。

評価：★★★★★